

「揺るがぬ希望をもって」（ヘブライー〇章一九〜二五節）

1 大祭司キリスト

今日から待降節に入ります。一月中旬の待降節は少し早い感じですが、教会の暦では今日が新しい一年の始まりです。

待降節はもともとアドベントと呼ばれている期間です。アドベントの意味は、ご承知のように「到来」です。向こうからこちらに来るといふことです。

この、「来る」、あるいは、「向こうからこちらに来る」という言葉、教会ではよく使う、使われている大切な言葉の一つです。例えば、主の祈りには「御国を来たらせたまえ」という言葉があります。使徒信条で私どもは、イエス・キリストを、「かしこより来たり」、生きている者、死んだ者、すべてを審き、永遠の命を与えてくださる方と告白しています。

このように、来る、こちらに来るといふ言葉がよく使われるということは、逆から見れば、ここには、この世には、私どものところには、救いはないということ告白していることになるのではないのでしょうか。

そうであるなら私どもは、救いが、こちらに来ることを待たなければならぬ、待ち望まなければならぬ。救い主の到来を待つ、イエス・キリストを待つ、それがアドベント、待降節なのです。

待降節はクリスマス前の四週間です。今日、最初の蠟燭に灯がともされました。暗闇に輝く光。闇を追い払うにはまだ十分でないかも知れません。しかし光はこうして確かに世に輝き始めています。世とは、私どもの周囲のことだけではありません。じつに私ども自身のことです。光は、私ども一人ひとりの中に、すでにともされています。やがて四本目の蠟燭に灯がつけられます。そしてクリスマス。イエス・キリストのご降誕です。

さて今日の聖書は、ヘブライ人への手紙です。文字どおり、ヘブライ人に宛てて書かれた手紙です。

ヘブライ人とは、ユダヤ人を意味する由緒ある古い呼び名です。この手紙を書いた人は誰か、はっきりしていないのですが、書いた人が、ヘブライ人、すなわち、ユダヤ人でキリスト者となった人、その群れの人々を念頭において、これを書いたことは確かなことです。

福音が、ユダヤ人でない人たち、聖書で「異邦人」と呼ばれている（ユダヤ人から見て外国人のこと）人たちのあいだに、どんどん広がっていく中で、本家本元のユダヤ人にイエス・キリストの福音を正しく理解してもらうにはどうしたらよいのか、それがこの手紙の問題意識です。

そのため著者の取った方法は、ユダヤ人のよく知っている、ユダヤ教徒の生活、その習わしなどを背景に、イエス・キリストを、それにあてはめて説明するというものでした。

その一つが、今日の箇所にも関係する、祭司、いな、むしろ大祭司の存在、その役

割でした。大祭司のことならユダヤ人も、よく分かっていたわけです。それを引き合
いに出し、比べながら、イエス・キリストを、大祭司、まさにまことの大祭司として
説明しようとしたのです（八・一以下）。

そこで今日の箇所を取り上げる前に、ユダヤ教の大祭司について、少し申し上げて
おきたいと思います。

大祭司というのはエルサレム神殿で祭儀を執り行う祭司の長のことです。しかし組
織のたんなるトップというのではなく、王と同じく、神の特別の召しによるものとし
て、任職のさい油注がれていました。大祭司の務めの中心は、年に一度、大贖罪日と
呼ばれている日に、神殿の至聖所に入り、人々の罪をあがなう儀式を行うことにあり
ます。至聖所とは、見えない形で神が臨在する場所です。その前には、へだての垂れ
幕がかけられました。

その日、大祭司のすることが、旧約聖書レビ記（一六章）に記されています。簡単
に言えば、大祭司はまず自身自身の罪のあがないのために雄牛の血を祭壇に注がなけ
ればなりません。それから民の、イスラエルの民の罪のあがないのために、山羊の血
を注ぎ、いけにえをささげたのです。

大贖罪日は年に一回です。つまり毎年行われていました。しかし毎年くり返されな
ければならないということは、あがないの効果が絶対的なものでないということ在意
味します。なぜでしょうか。大祭司は自分の罪のゆえにあがないを全うする資格をも
っていない。罪のない人にしか、罪を完全にあがなうことはできない。イエス・キリ
ストは罪なき方です。この方の命が差し出されることによって、罪は完全にあがなわ
れます。そのただ一回のあがないは、すべてに通じる決定的なあがないであったので
す。これが、ヘブライ人への手紙のキリスト理解です。そしてこの永遠の大祭司キリ
ストは、いま天の聖所にあつて私どもを執り成しておられます。

2 新しい生きた道

さて、いま申し上げたようなキリスト理解、今日の箇所は、そうしたキリスト理解
を確認した上で（一九〜二一節）、更に私どもに、なお許されたこの人生の時間、ど
のように生きるべきか語っているところです（二二節以下）。はじめにキリスト理解
を確認しておきます。

それで、兄弟たち、わたしたちは、イエスの血によって聖所に入れると確信して
います。イエスは、垂れ幕、つまり、御自分の肉を通して、新しい生きた道をわ
たしたのために開いてくださったのです。更に、わたしたちには神の家を支配
する偉大な祭司がおられるのですから・・・（一九〜二一節）。

文章としては途中でありますが、ここまででひと区切りです。ここにあるのはヘブライ書
のキリスト理解です。私どもへの戒めでも励ましてもありません。私どもがどうすべ
きかどうしてはならないか、ということではありません。そうではなくて、それ以前
の、もつと客観的なことです。私どもが何かをしたりしなかったりする以前の神と人

との関係の変化です。

この変化をもたらしたのは、大祭司イエス・キリストでした。この方は、罪無き方として、自らに担ったのは他人の罪でした。罪はこの方に引き受けられて、私どもの罪はあがなわれたのです。別の言い方をすれば、神へ近づき、関わりをもつことが私どもに許された。それは主観的なことではなくて、客観的なことでした。

こう言ってもいいと思います。人は、本来その家の者ではないのに、神の家の者とされた、と。神の家を治めているのが大祭司イエスです。それゆえ私ども、その恵みのご支配のもとに、この大祭司に執り成されて生きることができるようになる、事実としてなつたのです。

執り成しというのは、例えて言えば、父に叱られ、しょんぼりしている弟を見た兄が、父のところいき、代わって何とか赦し乞うようなことであります。そうした執り成しのもとに生きることができるようになる、それがイエス・キリストによつてもたらされたのです。

いま、ここで起こったことは、客観的なことだ、客観的な変化だと申しました。それに違いはありません。しかしそれが、私のために起こった、私どものために起こったこととして受けとめられなければ、せつかくの客観的な変化も、何の意味ももちえません。

この手紙の著者は、そのような客観的な変化を「確信しています」と、言っています。この「確信」は、信頼であり、それゆえ喜びであり、大胆さであり、ルターがそう訳したように自由ということでもあります。神に近づく自由を、人は勝ち取らなければならぬというわけではありません。その自由は人に差し出されています。そうした自由と確信をもつて私どもは、キリストが開いた新しい生きた道を歩んでいくことが許されます。

3 信仰、希望、愛

さてイエス・キリストによつてすべての人のために、それゆえ私どものため、私のために起こった変化、それを受けとめて私どもは、どのように生きていくべきなのでしょうか。

今日の箇所の後半に目を向けたいと思います。

心は清められて、良心のとがめはなくなり、体は清い水で洗われています。信頼しきつて、真心から神に近づこうではありませんか。約束してください。真実な方なので、公に言い表した希望を揺るがぬようにしっかりと保ちましょう。互いに愛と善行に励むように心がけ、ある人たちの習慣に倣って集会を怠つたりせず、むしろ励まし合ひましょう。かの日が近づいているのをあなたがたは知っているのですから、ますます励まし合おうではありませんか(二二〜二五節)。

少し長い一続きの文章、少し分かりにくいところですが、大きく三つのことが勧められ、呼びかけられています。

一つは、「信頼しきって、真心から神に近づこうではありませんか」。二つ目は、「希望を揺るがぬようにしっかりと保ちましょう」。そして三つ目は、「互いに愛と善行に励むように・・・励まし合ひましょう」。三つを合わせれば、信仰と希望と愛において歩んで行こうと呼びかけています。

これら一つ一つ簡単に取り上げたいと思いますが、その前に、こうした私ども信仰者の歩みがなされる、時（とき）というものを、考えておく必要があります。とくに今日からアドベントです。ふだんにもまして私どもは、時を意識して歩まなければならないのです。

ふだんにもまして時を意識する、そのことを、この箇所は、最後のところで、「かの日が近づいているのをあなたがたは知っているのですから」と書いて、私どもに注意を喚起しています。

いまのこの時はどういう時か、ということですが。私どもが、どういう時を生きているかということですが。キリスト者とは、この時を知っている者のことです（ローマ一三・一一）。いまがどんなに暗くても、蝋燭一本では間に合わないように思われるほど暗くても、やがて日の光がすべてを照らすことを知っているのです。私ども、部屋の中で、カーテンを閉めています。しかしそのカーテンを通して、外が明るくなりつつあるのは分かるのではないのでしょうか。そのような時の中を、私どもは歩んでいくのです。

キリスト者は、その射し来たらんとする光へと照準を合わせます。この見える現実ではなく、それを越えたところに照準を合わせます。神の言葉に聞くのです。神の御心に従うのです。そこに新しい生ける人の道があります。

さっきの三つの勧めに戻ります。三番目の勧めから取り上げたら、よいかも知れませんが。

かの日が近づいていると言っても、目に見える何か兆候がなければ、その信仰を保ちつつけるのは難しい。すぐゆるんでしまいます。そうした人たちのことをヘブライ人への手紙の著者は言っているでしょう。「ある人たちの習慣に倣って集會を怠ったり」しないように、むしろ、互いに愛と善行に励むよう、励まし合えと。

さて一番目の勧めです。「心は清められて、良心のとがめはなくなり、体は清い水で洗われています。信頼しきって、真心から神に近づこうではありませんか」。中心にある言葉は、「信頼しきって、真心から」です。信仰に満たされた真実の心をもって訳すこともできます。要するに、信仰、信です。欺きのない心、素直な心で神の前へ出ることです。

最後に、二番目に戻ります。「公に言い表した希望を揺るがぬようにしっかりと保ちましょう」とあります。しっかりと保たなければならぬ、保つことのできる、その根拠を、この手紙の著者は、神の信実、神の信に求めています。神は自らの約束にどこまでも忠実な方なのです。

さて今日からアドベント、待降節。イスラエルの民は、神の救いの約束、メシアの現れを長い間待ちつづけました。ついに神は、暗闇の底にあった民に、メシアなるイエスを送ってくださいました。まさにこの事実、神の信実に、私どもの揺るがない希望の根拠があるのです。